

「神学校。ああ、恵みの時。」

私が学んだ神学校には、実に様々な献身の動機を抱えた人間がうごめいていました。イエス・キリストとの劇的な体験を通して献身を決意した人たちがいました。社会人として全く頭打ちに合い、会社にも行けずに酒におぼれている中で、聖書に触れ、キリストに出会い、教会生活を始めることで、だんだんライフサイクルが変わり、酒からも離されていった。そのことが嬉しくて献身したという人がいました。いわゆる「不良少年」で暴走族あがりの男もいました。レコードを2枚出した演歌歌手くずれもいました。金をつぎ込んでレコードを制作し、どさまわりを重ねて、だんだんレコード会社からも相手にされなくなり、捨てられてボロボロになった経験を持つ男もいました。このように、自分自身が七転八倒しながらも、イエスによって癒されて、受け入れられ、変えられ、感謝と喜びとが献身の決意となっている人たちがいます。

大学在学中に出会った一人の牧師の生き様を通して、伝道者として生きていきたいと思うようになったという学生もいました。学生の時に韓国青年交流のプログラムに出て、韓国の若いクリスチャンたちの情熱に触れて自分も日本で信仰を燃やして生きていきたいと思ったという人もいました。ある牧師の息子の場合、自分は不真面目な教会生活をずっと送ってきたのだが、ある重鎮の教会員女性で、牧師一家が何かと世話になっていた方が、ガンで亡くなる時に自分を病床に呼び寄せ、「あなた神学校に行きなさい。牧師になってちょうだい」と泣きながら遺言されたという人もいました。このように、人との出会いに強く影響を受け、また促されて神学校に来ていた人たちがいます。

キリスト教福祉施設で働いていたという人もいました。福祉に取り組みば取り組みほど、人間の根元的な救いというものの意味について考えさせられ、そのことを一生考えていきたいと思ったという人もいました。そのように、キリストと人々に仕える働きをすでになさりながら、更に福音を担うということの一つの深まりを自分なりに考え、明確な意志と目的をもって神学部に来ていた人もいます。

神学という学問そのものに強い関心を持っている人もいましたし、またキリスト教学校の聖書科の教師になりたいと最初から望んで神学部に来て、教職課程科目を一生懸命受けている人もいました。

こうした一人一人、色んな出会いと色んな気持ちで集まって来た者たちが、一つところで共に学んでいる、それが神学校です。そこにはかたちはどうであれ、「献身」という共通の経緯があり、そして「召命」というおごそかなテーマがあるのです。そして何より、それら一人一人の背景に「教会」があり、送り出した人々の涙ぐましい祈りがあるのです。

ところで、神学校での学びは、単なる知識や技術を習得することに中心があるような、一般論や他人事ですませられる学問ではありません。どの科目を受講しても、自分の信仰と主体性が問われるのです。それは重い授業の連続です。全てに問いかけられてしまう、そんな内容ですから。

このように、神学生には誰にも「献身」という経緯があり、「召命」というテーマがあり、また信仰を問われるという「試練」があります。学びながら行き詰まり、恐ろしくなることが度々あります。後戻りしたくなることがあります。神学し始めると、自分の信仰にメスを入れられ、検討を迫られていくことになるからです。情熱だけで入学しても、「あ

あなたのその信仰は言葉にすればどういうことになるのか」「またそれは過分にあなたの思いこみの強さの現れなのではないのか」と問われるし、また、「あなたは自分の充実や自己実現のために牧師になろうとしているのか、教会とキリストに仕えようとしているのか」と、冷や水をかけられるのです。ガーンと頭を殴られた感じになります。「信仰」は試され、揺さぶられ、ある意味では「信仰の危機」に直面するのです。そうした試練を受けながら、さらに自分の信仰を見出し、定めていく作業が神学する生活です。また、神学するということは、自分の貧しさを思い知らされていくという壁に必ずぶつかります。果たして伝道者として自分がふさわしいのかどうか、自分になれるのか、能力的にも人間としても「ぜんぜんだめだ」と不安に襲われることがあります。卒業と赴任を控えた神学生たちの全員が、その恐ろしさによるふるふる震える経験を持っているはずで

そして、多くの神学生たちは、特に西南神学部のような場合、それまでの仕事を辞めて入学している人が多いですから、経済的不確実性という問題を抱えています。3～5年間の学びを完遂することができるための貯蓄を蓄えて献身しましたという準備万端の人はいませんから、みんな飛び込んで来ているわけです。差し上げることのできる奨学金は、贅沢などできる額ではもちろんありませんし、少しはアルバイトしないと苦しいかなという額ですから。けれども母教会から祈られ、壮年会連合から奨学金を受け、毎日毎日を過不足なく「1オメルで養われる」という体験を通して、そこでこそ大切な「献身者の経済観念」を学ぶのだらうと思います。経済的な不確実性が、何かを培っていくのです。

一人の人が献身し、神学校の学びをやり終えて現場にでていくのには、こうした様々な厳しさがありますが、この全ては、「恵みの時」です。そして、ここに学んだ者は知るのは、「神のゆるしと導き」「謙遜な信仰姿勢」「人々の祈りと支援」なしに、成し遂げられないのだ、と。

神学校で、一人の人間に起こっていること。それは、なかなか凄い出来事です。それは、いろいろな力が内から外から働いて成立しています。伝道者養成を祈り、神学生たちを奨学金をもって支えるという運動も、まぎれもなく、それを成立させている力の一つです。大きな力の一つです。壮年会連合の祈りと運動、確実に、神学生たちを包囲し、応援し、励まし、共に歩んでいる業なのです。

日本バプテスト連盟

常務理事 吉高 叶